

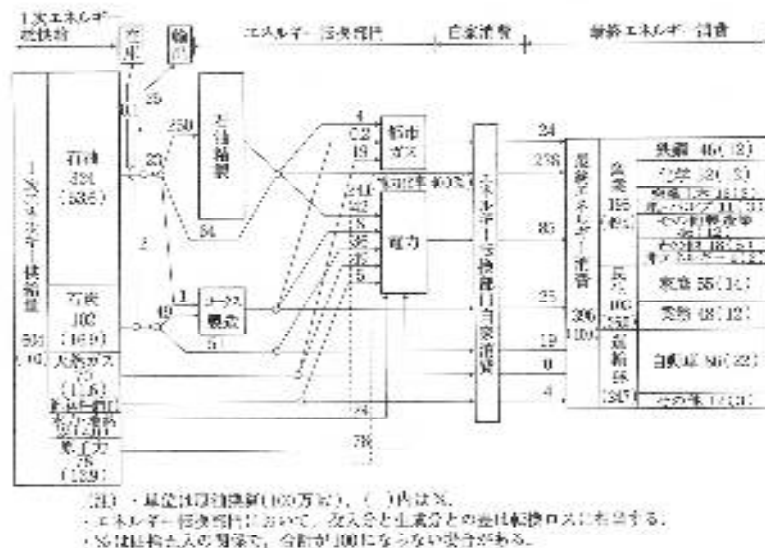
科 目	必・選	担 当 教 員	学 年 ・ 学 科	単 位 数	授 業 形 態						
エネルギー工学 (Energy Engineering)	選	福田 匡	5 年生 機械工学科	2	通年 週 2 時間						
授業概要	エネルギーに関する基礎的な知識と技術を学ぶ。エネルギーの各形態、伝熱工学の基礎知識、エネルギー機器の応用事例を概説して解析を行う。応用熱力学や燃焼理論、省エネルギーやコジェネレーションについても概説する。										
到達目標	エネルギー(熱)管理士の受験基礎レベル、伝熱工学やエネルギー関連の基礎レベル										
評価方法	授業毎の課題・レポート(40%)と定期試験(60%)で評価し、総合して60%以上を合格とする										
教科書等	「エネルギー工学入門」梶川武信著 掌華房										
内 容					学習・教育目標						
第 1 週	エネルギー問題（人類とエネルギー、エネルギー需要の動向、環境問題）				C						
第 2 週	エネルギーの生成と変換（エネルギーの形態、エネルギーの変換・貯蔵）				C						
第 3 週	エネルギーの評価（熱エネルギー、力学的エネルギー、電気エネルギー）				C						
第 4 週	力学的エネルギーとその変換[1]（形態：運動、位置、回転）				C						
第 5 週	力学的エネルギーとその変換[2]（揚水発電所、風力発電、波力発電）				C						
第 6 週	熱エネルギーとその変換				C						
第 7 週	伝熱の基礎/機構：伝導、対流、輻射 伝導伝熱の特性				C						
第 8 週	伝熱の基礎/対流伝熱、沸騰伝熱、凝縮伝熱				C						
第 9 週	伝熱の基礎/輻射伝熱				C						
第 1 0 週	伝熱機器の設計～熱交換器を例として				C						
第 1 1 週	熱エネルギーの変換サイクル[1]（火力発電～蒸気サイクル）				C						
第 1 2 週	熱エネルギーの変換サイクル[2]（地熱発電、海洋温度差発電）				C						
第 1 3 週	熱エネルギーの変換サイクル[3]（熱電発電など）				C						
第 1 4 週	省エネルギー技術[1]				C						
第 1 5 週	省エネルギー技術[2]				C						
第 1 6 週	化学エネルギー[1]（化学エネルギーの形態、燃料電池）				C						
第 1 7 週	化学エネルギー[2]（燃料電池[続き]）				C						
第 1 8 週	化学エネルギー[3]（燃焼）				C						
第 1 9 週	電磁エネルギー[1]（電磁エネルギーの形態）				C						
第 2 0 週	電磁エネルギー[2]（発電機・電動機）				C						
第 2 1 週	電磁エネルギー[3]（MHD発電）				C						
第 2 2 週	光エネルギー[1]（光エネルギーの形態、光子エネルギー）				C						
第 2 3 週	光エネルギー[2]（太陽光発電：原理、発電システム）				C						
第 2 4 週	核エネルギー[1]（				C						
第 2 5 週	核エネルギー[2]（				C						
第 2 6 週	核エネルギー[3]（				C						
第 2 7 週	新エネルギー[1]（バイオ メタンハイドレート 等）				C						
第 2 8 週	新エネルギー[2]（クリーンコール 等）				C						
第 2 9 週	エネルギー工学の評価指標				C						
第 3 0 週	総合まとめ				C						
(特記事項)		JABEEとの関連									
		JABEE	a	b	c	d-1	d-2	e	f	g	h
		本校の学習 ・教育目標	A	A	C	C	C	B	D	B	C

5 A 「エネルギー工学」ガイダンス

エネルギーそのものは、目には見えないが、我々の日常生活や社会・経済の基盤である産業等のあらゆるところで利用され、我々人類の文明の発展にとって欠くべからざるものである。すべての工学の分野で何がしかの形でエネルギーが関与してくるので、工学の共通の基盤知識としてエネルギーの概念を理解しておくことは必要となり、それぞれの専門分野の中で、違った局面への展開のヒントになる等、エネルギー分野はもちろん、それ以外を専門とする人々にも役に立つものと思われる。エネルギーに関わる工学の分野は非常に広く、エネルギー資源・環境工学、エネルギー変換工学、エネルギー利用・応用工学、ライフサイクルアナリシスやエネルギーモデルを含めたエネルギーシステム工学などがあり、それぞれの境界は入り組んでいる。

梶川武信「エネルギー工学入門」の「序文」より引用

我が国のエネルギー自給は5 %以下にとどまり、その多くは化石燃料に負っている。原油価格の高騰は産業に深刻な影響を与えているが、今後も化石燃料が潤沢に供給される状態が持続するとは考えにくい。従ってエネルギー源ならびにその変換に関する工学は、産業や生活インフラを支える知見としてますます重要となる。



我が国のエネルギーフロー（梶川武信「エネルギー工学入門」より転載）



エネルギー変換マップ（梶川武信「エネルギー工学入門」より転載）